

物価高をしたたかに生き抜くすすめ

漫画家 水木しげる

ビール代は上がり、東京は世界で一番物価が高いといわれているが、考えてみれば安いものを食べばいいので別におどろくこともない。

安いというと、人はよくまずいといった先入感をもつが、それは間違いで、空腹であれば、胃液も充分出て、とてもウマイのだ。

空腹でないのに安いものはまずいという先入感をもつて、いやいやながら食べるからまずいので、空腹こそ、最良の美味なのだ。

ビールが高いといつて二本飲むところを一本にすればよいただである。

この一本しか飲めないという凝縮された快感は、優に二本分と同じ快感なのですよ。

要するに、カミサマは腹をすかした者がいいように人間を作っているのだ。

いまの人間はよりうまいものを食べようとして、よりまずいものを食べている感じだ。

ぼくは昔、といっても二十二、三年前の話だが、ヒゲの田辺一鶴さんと亀戸の三食つきで七千円という下宿にいたが、米はもちろん外米のポロポロで、少し金があると、もう食いたくなるようなシロモノだった。

月末になって金がなくなると、いつも外米の残飯を一鶴さんと大きなドンブリに三バイ、お茶ずけで食べるのを常としていたが、オカズは大根だけ。

それがバカにうまいのだ。二人とも三バイ平らげるのにもがいえないうというおいしさだった。

いま、仮りに上等のヒレのピフテキを食ってみたところで、あの外米のうまさには及ばないだろう。要するに、空腹に目覚めることこそカンジンなのである。

すなわち、空腹の快感というやつだろう。

空腹になって、モノを食べればなんでもともうまいのだ。

物価高は、そういう人間本来、体にそなわった空腹の「スガガシ」を味わうまたとないチャンスである。味わうなんて、そんな軽い表現ではなく、よくキリスト教などというつまずきの石、という表現があたっているかもしれない。

すなわち、人間はつまずかなければ、カミを知る機会もないという。

物価高のつまずきによって、人間に本来そなわっている空腹の美味を発見するまたとなき機会である。

過保護気味の医者言葉なんか、あまり気にすることはない。

タクシー代が上げればなるべく歩くようにすればよいただくことで、物価が上げればそれだけ自然にかえる、原始にかえる生活になるわけだから、むしろ上がった方がいい。

政府だとかミノべさんなんか、物価を下げてくれなんていう必要はないのだ。

むしろ、「フクダさん、ミノべさ

ん、物価をどんどん上げて下さい」とお願いすべきだろう。

物価が下がってゼイタクすると、ロクなことはない。

むしろ、政府に物価高をお願いして「人間は物がなくてもこんなに楽しく暮らせるもんだなア」という発見をさせてもらった方が、どれだけ国民を「あわせに」することだろうか。

また人間が病気になるってこまった時、お世話にならないければならない医療費、これをどんどん上げて下さる武見会長さんにも、この際、どんな医療費を値上げしていただいで、医者には金持ちだけがかかることにしよう。

我々は針とかきゅう、またはアフリカあたりから呪医を呼んだりして、新しい医学を開発すべきではないかと真剣に考えている。

